研究論文

縄文時代から弥生時代へ

― 中四国地域を中心に ―

中村　豊

要　旨

本稿では、中四国地域を中心に、呪術具・生業・集落の分析を通して、縄文時代から弥生時代への変化と画期を考察した。

大型石棒は、縄文中期末頃に植物利用上の画期と大型集落の沖積平野への進出をともなって、列島東部よりもたらされる。縄文後期中葉～晩期後葉にかけて、刀剣形石製品の盛行やダイズ・アズキの生産とともに、集落形態は小規模・短期移動・散住型へ移行する。縄文晩期後葉にはイネ・アワ・キビの生産を開始する。

縄文／弥生移行期には三谷型石棒が、列島西部東半一帯という広域に持ち運ばれるようになる。狩猟採集に農耕をくわえた生業を踏襲する一方で、大陸系文物を導入し、灌漑施設を擁する集落が形成されはじめた。特性を異にする複数の集落が、狭い範囲に併存する過渡期の様相は「共生（中村 1998・2022）」とよぶにふさわしい。

弥生前期中葉に、大規模な灌漑施設や水田を擁する灌漑水田稲作を生業の軸とする集落が成立する。三谷型石棒の生産停止は、列島西部東半一帯における地域社会の解体を意味する。すなわち、それは広域にわたる集落・地域社会の画期的な変容を示唆すると考えられる。

キーワード：縄文晩期、石棒、生業、縄文集落、農耕の起源

はじめに

本稿では、縄文時代から弥生時代への変化について、縄文中期末から弥生前期中葉を射程に、呪術具・生業・集落の 3 方面から四国地域を中心に論じ、必要に応じて中国地域なども取り上げる。その上で、列島西部一帯にわたる歴史的背景と画期を見出していきたい。

1．呪術具 ― 石棒を中心に ―

（1）中四国地域における石棒概説

石棒は、縄文中期末ごろに、磨消縄文の土器や打ち欠き石錘、石囲炉、隅丸方形の住居などとともに列島東部から西部へ流入する（泉 1985）と、今のところ考えられている[1)]。

縄文中期末から後期前葉にかけては、大型でやや粗い作りの大型石棒が、中四国地域の東半くらいまで伝播する。大型石棒は、その後刀剣形石製品と併存しつつ、縄文晩期末まで脈々と継続していく。

縄文後期中葉頃から、小型で丁寧に研磨を施した精製の小型石棒がみられるようになる。縄文後期後半から縄文晩期前半には、小型石棒に刃部をもつ刀剣形石製品が現れる。刀剣形石製品には石剣・石刀の 2 種類があって、東北から中部・関東地域は石剣、中部地域から九州地域は石刀が主たる分布域となる（後藤 1986・1987）。

縄文晩期後半から縄文／弥生移行期[2)]、とくに大洞 A 式土器併行期以降になると、上記の石棒類は関東地域以北で姿を消していく。一方で、中部地域西部から中四国地域東部にかけての地域において、中・大型石棒、とくにやや粗製の大型石棒の隆盛をみるようになる。これが縄文時代における最後の石棒の隆盛である（中村 1998・2005・2007・2009・2013・2014a・2022・2023a・b、中村編 2001 など）。

（2）石材からみた中四国地域における石棒

石棒は、比較的広域にもち運ばれる石器ではあるが、この地域では縄文晩期末の三波川結晶片岩製をのぞいて、広大な分布圏を形成するまでにはいたらない。

中国地域では、大型石棒に凝灰岩または安山岩系、砂岩系、周防蓮華帯変成岩系がみられ、刀剣形石製品ではこれに泥岩系、ホルンフェルス系などが加わる。例外としては、庄原市帝釈寄倉岩陰遺跡、岡山県鏡野町久田原遺跡、鳥取県智頭町智頭枕田遺跡例のように、遠隔地からの搬入品が単発的にみられることがある。

一方で、四国地域の石棒は、北部では三波川結晶片

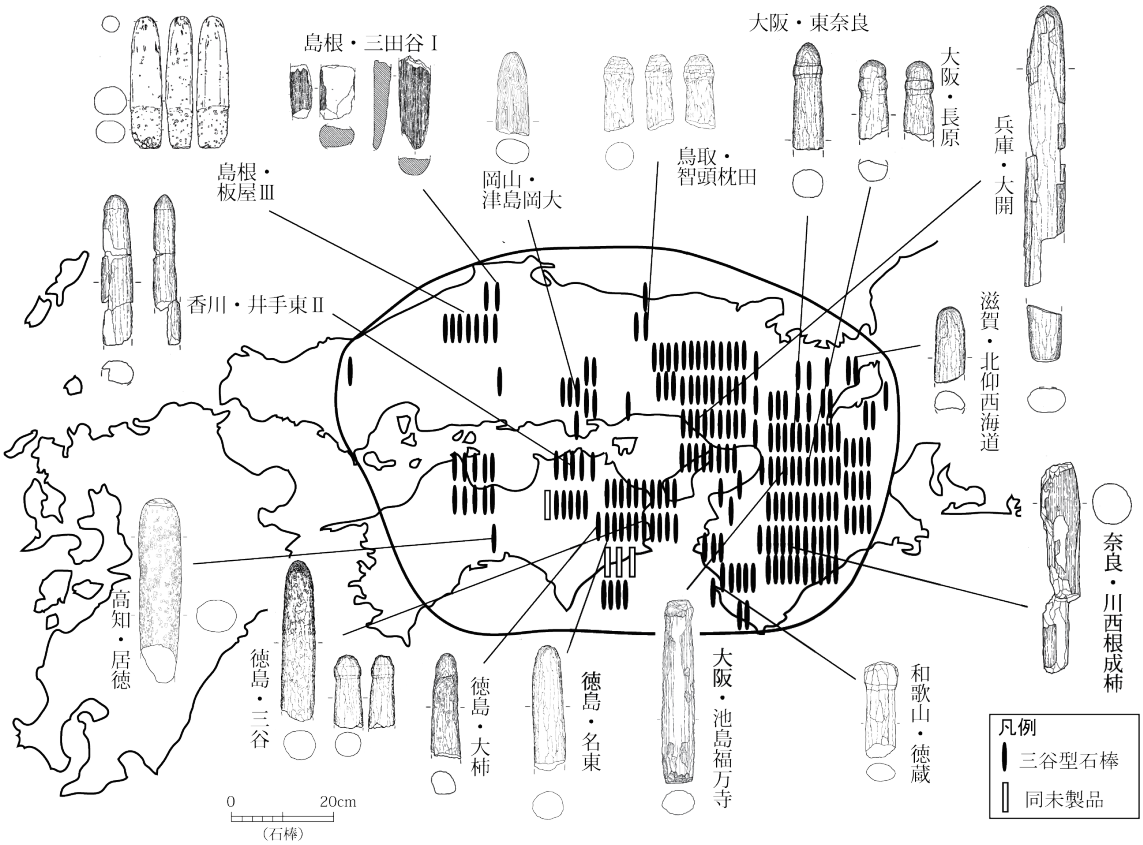


図１　三谷型石棒の分布

岩系が多く、南部では砂岩系がこれに加わる。三波川結晶片岩は、香川、愛媛西南部、徳島南部、高知南部など、分布圏外からも見出されるため、徳島北部と愛媛北部が製作の中心であったと考えられる。結晶片岩製の石棒は、縄文中期末から晩期前半までは四国地域外へもち出されることは少ないが、縄文晩期末になると、山陰地域をはじめ遠隔地へと運ばれていった。

（３）石棒の変遷

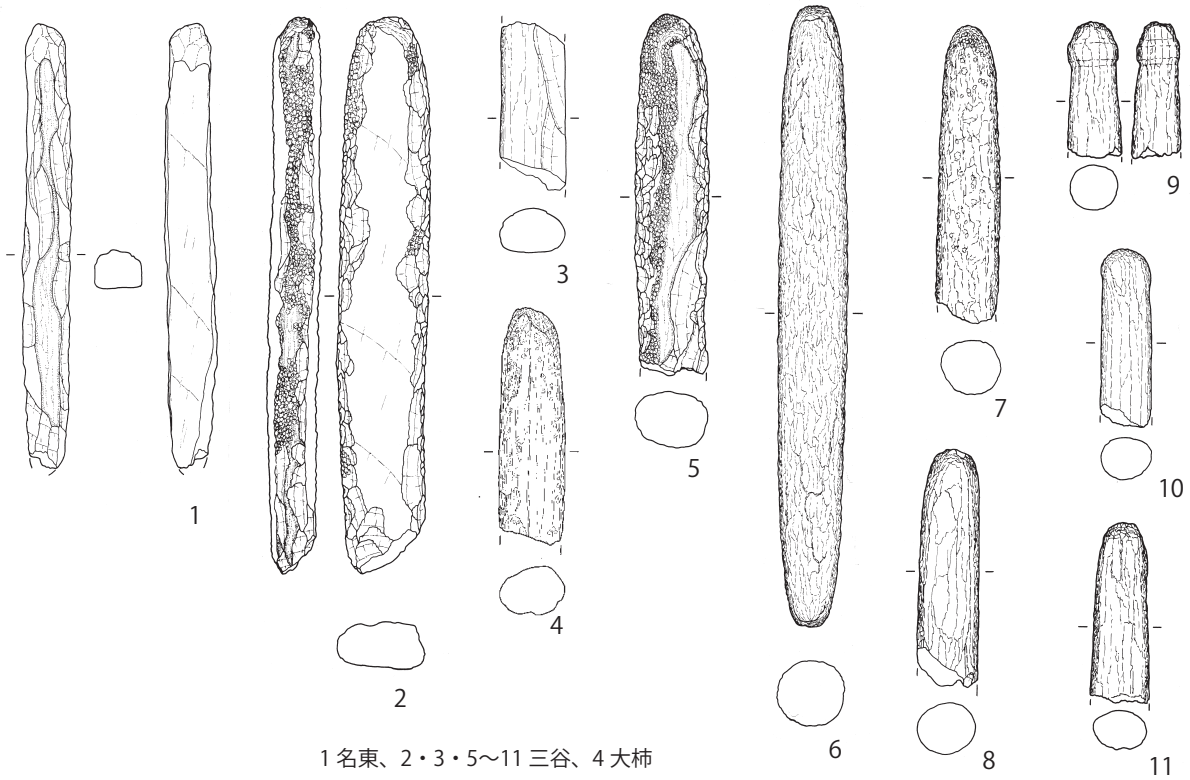
初期の大型石棒（縄文中期末から後期前葉）は、鳥取市栗谷遺跡、松江市夫手遺跡、大田市中尾Ｈ遺跡、島根県津和野町大蔭遺跡のほか、徳島市矢野遺跡、徳島県つるぎ町貞光前田遺跡、善通寺市中村遺跡などの類例をあげることができる。

縄文後期中ごろから晩期中葉にかけては、小型石棒や石刀といった精製の刀剣形石製品がみられるようになる。島根県奥出雲町原田遺跡、山口県平生町岩田遺跡、帝釈寄倉岩陰遺跡、久田原遺跡、倉敷市舟津原遺跡、智頭枕田遺跡などのほか、四万十市中村貝塚、徳島県東みよし町稲持遺跡、徳島県海陽町大里浜崎遺跡などがある。一方四万十市大宮・宮崎遺跡、徳島市庄遺跡、西条市池の内遺跡、岡山市大森遺跡など、大型石棒も散見する。

縄文晩期末から縄文／弥生移行期には大型石棒が隆盛する。三波川結晶片岩製がこれまでになく広い範囲に分布するところが特徴的である。大蔭遺跡、出雲市三田谷Ⅰ遺跡、島根県飯南町森Ⅰ遺跡、同板屋Ⅲ遺跡、同門遺跡、原田遺跡、智頭枕田遺跡、鳥取市本高弓ノ木遺跡、庄原市長者ヶ原遺跡、岡山市百間川沢田遺跡、同津島岡大遺跡、徳島市三谷遺跡、同名東遺跡、徳島県東みよし町大柿遺跡、高松市東中筋遺跡、同井手東Ⅱ遺跡、坂出市下川津遺跡、善通寺市龍川五条遺跡、新居浜市上郷遺跡、今治市中寺州尾遺跡、同阿方遺跡（報文では敲石）、松山市船ヶ谷遺跡、同北井門遺跡、同道後今市遺跡、土佐市居徳遺跡などで出土している（図 1）。

なお、安山岩ないし凝灰岩系の石材を用いた、在地色の強い角柱状の特徴的な石棒が、出雲市蔵小路西遺跡、米子市青木遺跡、同長砂第 3 遺跡、本高弓ノ木遺跡など山陰地域に分布する[3)]。また、四国南部地域では、居徳遺跡、高知市仁ノ遺跡、南国市田村遺跡などに緑色岩製の石棒がみられる。

以上で注目すべき資料は三谷遺跡で、未製品や完形率の高い資料が計約 30 点集中して出土している（図



1 名東、2・3・5〜11 三谷、4 大柿

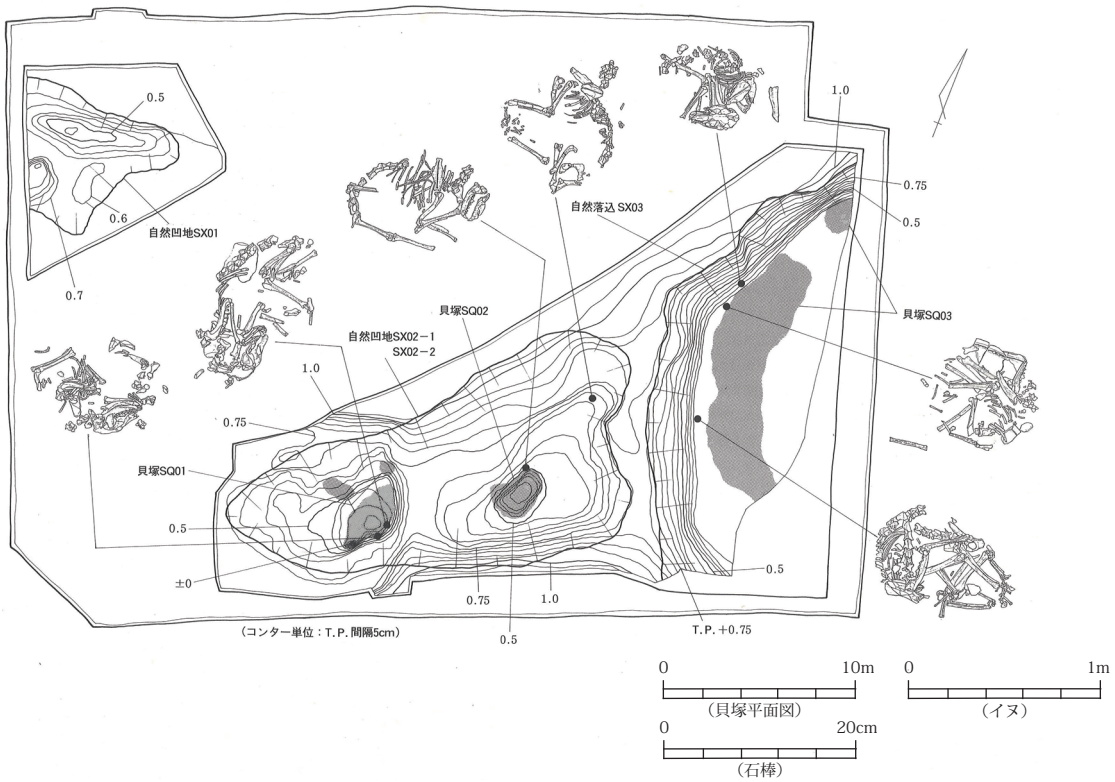


図 2　三谷型石棒と三谷遺跡石棒出土遺構

1・2、勝浦編 1997)。当該期の資料群において、未製品がもっともまとまって出土する遺跡は三谷遺跡であり、名東遺跡や大柿遺跡がこれに次ぎ、いずれも四国東部地域に集中する（図 2)。また、三田谷Ⅰ遺跡では原産地の検討もおこなわれ、山陰地域へ三波川帯産結晶片岩製の石棒がもち込まれていると推定されている（高須 2000)。縄文中期末から後期前葉以来、大型石棒の生産は各地で脈々と受け継がれていったと考えられるので、三波川帯の近畿南部地域や四国西部地域でも小規模な生産は縄文晩期末まで継続したとみるべきである。したがって一元的な生産とまではいえないが、当該期における少なからぬ数の結晶片岩製石棒は四国東部地域、なかでも三谷遺跡において生産され、もち運ばれていったものと考えられる。このあり方は特徴的であるため、小林青樹氏（小林編 2000）によって「三谷型石棒」と名付けられている。

三谷型石棒は、近畿地域においても広く分布する（泉 1985、大下 1988、中村 1998 など)。大阪湾沿岸から紀伊水道沿岸地域では、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡、たつの市新宮宮内遺跡、神戸市大開遺跡、伊丹市口酒井遺跡、大阪市長原遺跡、茨木市東奈良遺跡、東大阪市／八尾市池島・福万寺遺跡、東大阪市弓削ノ庄遺跡、和歌山県みなべ町徳蔵遺跡、和歌山県すさみ町立野遺跡などから、内陸の橿原市橿原遺跡、大和高田市川西根成柿遺跡、御所市中西遺跡、京都市高倉宮下層遺跡、大津市滋賀里遺跡、高島市北仰西海道遺跡、米原市磯山城遺跡などにいたるまで多くの類例が報告されている（図 1)。

(4) 三谷型石棒のもつ意味

以上、縄文晩期末から縄文／弥生移行期にみられる三谷型石棒は、当該地域においてかつてないほど広い分布圏を形成するだけでない。長い縄文時代史上、石棒祭祀のもっとも発達する地域が列島西部に存在するのは当該期だけであり、背景には重要な歴史的事実が隠されていると考えられるのである。

縄文時代において広域に展開する文物には、以下①から③などの類型が認められる。

①労働用具としての剥片石器
②ヒスイ・クロム白雲母製玉類など稀少性のある遺物
③亀ヶ岡式土器など精製土器の優品

しかし、三谷型石棒の展開は、これらとはやや異なる特性をもつと考えられる。列島西部の石棒自体、縄文中期末から晩期末にいたる長い前史をもつが、遠隔地からもち込まれた一部の例をのぞいて、基本的に石材の流通範囲は相応の範囲内に収まる。一方三谷型石棒は三波川結晶片岩製のものが、前史の分布域を大きくこえて、おおよそ当該期の主要遺跡にまんべんなくみられるような形で広域にもち運ばれた。その分布相は稀少性のある②③のような「点在」とは異なっている。また石棒は呪術具であり、製作技術的・手工業的な評価でとらえうる労働用具、すなわち①の剥片石器とは技術と分業、交易の背景を異にすると考えられる。

それは特徴的な儀礼をともなう形で、招来され、もち運ばれたと推察される。すなわち石棒の製作技術と分業、交易の背景には、強い呪術性が垣間みえるのである。

当該地域社会において呪術具としての石棒は長く継続してきた。単純に儀礼の必要性からくる石棒の需要というのであれば、前史の分布域を超越する同一石材の広域展開を説明できない。すなわち、従来とは異なる歴史的かつ呪術的背景が列島西部東半地域一帯を覆ったことがうかがい知れる。

三谷遺跡は、灌漑水田稲作をともなった大陸系文物との出会いによって、地域社会の動揺に直面していた。それに対応するかのように、列島東部系の文物を積極的に取り入れ、儀礼をとりおこなう（図 2 下段）過程で三谷型石棒の生産を活発におこなった。そうして同様の事態に直面する列島西部東半一帯の諸地域社会において、三谷型石棒は儀礼をともなう形で招来され、もち運ばれたのではなかろうか。

三谷型石棒は、灌漑水田稲作が拡大するとともに、役割を終える[4)]。三谷型石棒の生産停止は、列島西部東半一帯での需要減、すなわち縄文時代を象徴する石棒を用いた儀礼の終焉（林 1988）をあらわしている。

以下、生業論、集落論から当該期の動向を多面的に評価していきたい。

2．生業 ― 農耕の起源と展開 ―

かつて縄文時代の遺跡から農耕をおこなっていた痕跡は、ほぼみられないと考えられたが、「レプリカ法」（丑野・田川 1991、中沢・丑野 1998、中沢 2014、小畑 2011・2016、中山 2010・2014・2020 など）の普及によって、関連資料は増加しつつある。なお検証すべき問題も残されてはいるが、以下の 2 点に関しては、日本列島における農耕開始にかかわる現時点での成果とみておきたい。

①中部地域を中心とする列島東部の縄文前期から中期以降に、ダイズ・アズキがみられる。
②列島西部から中部地域の縄文晩期後半に、イネ・ア

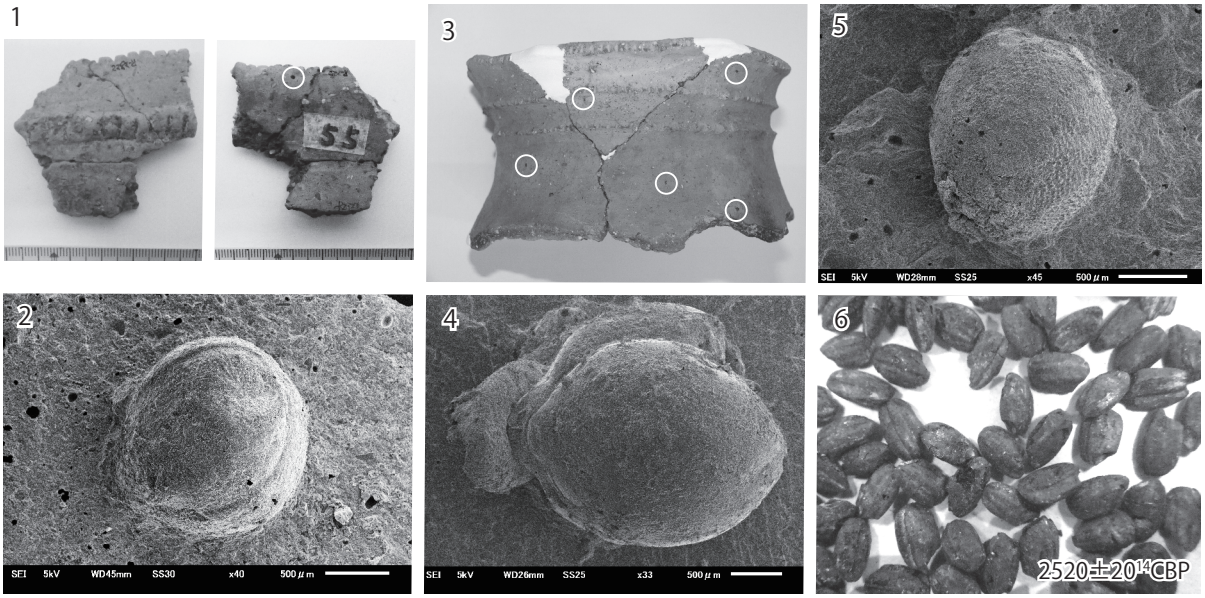


図 3　縄文晩期後半・縄文／弥生移行期の農耕関連資料
（1・2 名東遺跡アワ、3～5 三谷遺跡キビ・アワ、6 三谷遺跡イネ）

ワ・キビがみられる。一方灌漑水田稲作は、北部九州をのぞいてみられない。

縄文中期末、列島東部から列島西部へ文化伝播（泉 1985）が顕著に認められる。しかし、初期の農耕を含めた植物の高度な利用の伝播時期は明確でない。

矢野遺跡は沖積平野の氾濫原に立地し、弥生時代以後の遺跡と立地を同じくする。それまでみられなかった、水銀朱を塗布した土器、辰砂を加工した磨石・石杵が出土する（藤川・氏家・湯浅 2003）。水銀朱の精製開始は漆工芸、すなわちウルシ利用の活発化と結びつく。近年の研究では、ウルシへの人為的関与が指摘されており（鈴木 2014）、矢野遺跡出現の背景に、植物利用上の画期を認めてもよいだろう。また縄文晩期前半ではあるが、橿原市／御所市観音寺本馬遺跡や京都市中里遺跡といった、列島西部の数少ないダイズ・アズキ出土遺跡から水銀朱関連遺物が出土する点にも留意しておきたい。いずれにせよ、列島西部におけるマメ類出現過程の探究は今後の課題であるが、津島岡大遺跡例（那須ほか 2020）からみて、縄文後期中葉までには定着していた可能性が高い。

縄文晩期前半には、口縁部を外側に屈曲させて弥生土器の甕に近い「く」の字形の器形をした深鉢が普及し、煮沸法に変化のきざしがみられる。打製石斧や横刃形石器需要の急増も含め、新たな時代の胎動をみる。

今日、確実視される日本列島最古のイネ科穀物は、板屋Ⅲ遺跡のイネ圧痕（中沢・丑野 2003）と、福岡県粕屋町江辻遺跡（中沢 2015）・竹田市石井入口遺跡・宮崎市右葛ヶ迫遺跡・志布志市小迫遺跡（以上三点小畑 2015）のアワ圧痕などで、凸帯文土器出現期に相当する。

続く凸帯文土器後半期、すなわち沢田式（船橋式併行期）、長原式併行期で類例は多くなる。四国地域では、新居浜市上郷遺跡のイネの圧痕（中村 2015）、高松市林・坊城遺跡（遠藤 2012、濵田 2014）のアワ圧痕、同東中筋遺跡のイネ玄米圧痕など（中村 2015）がある。長原式併行期では、名東遺跡でイネ・アワの圧痕（図 3－1・2）、阿南市宮ノ本遺跡でイネの圧痕を確認できた（中村・中沢 2014）。

縄文／弥生移行期の三谷遺跡では、低地の埋没谷に面する貝塚（図 2 下段）から、アズキと多量のイネが出土し（図 3－6、那須ほか 2018）、レプリカ法でアワ・キビが相当数検出されている（図 3－3～5、中沢ほか 2012、中村・中沢 2014）。同時にイチイガシ・アカメガシワ・ヤマモモ（那須ほか 2018）などの採集もおこなっていた。内湾漁撈、狩猟採集活動（勝浦・市川編 2018）に適した立地環境の下、イネ・アワ・キビ・アズキの小規模な農耕をたくみに組み合わせていたとみられる。

居住域の標高約 1.6m（中村編 2017）で、立地環境も内湾に極めて近く、用水路を利用するタイプの灌漑水田稲作には向かない土地条件にある[5)]。アワ・キビ・アズキなどの畠作農耕を微高地の縁辺部などでおこない、稲作を水場付近でおこなって、既存の生業のなかに組み込んだとみてよいだろう。三谷型石棒を用いた

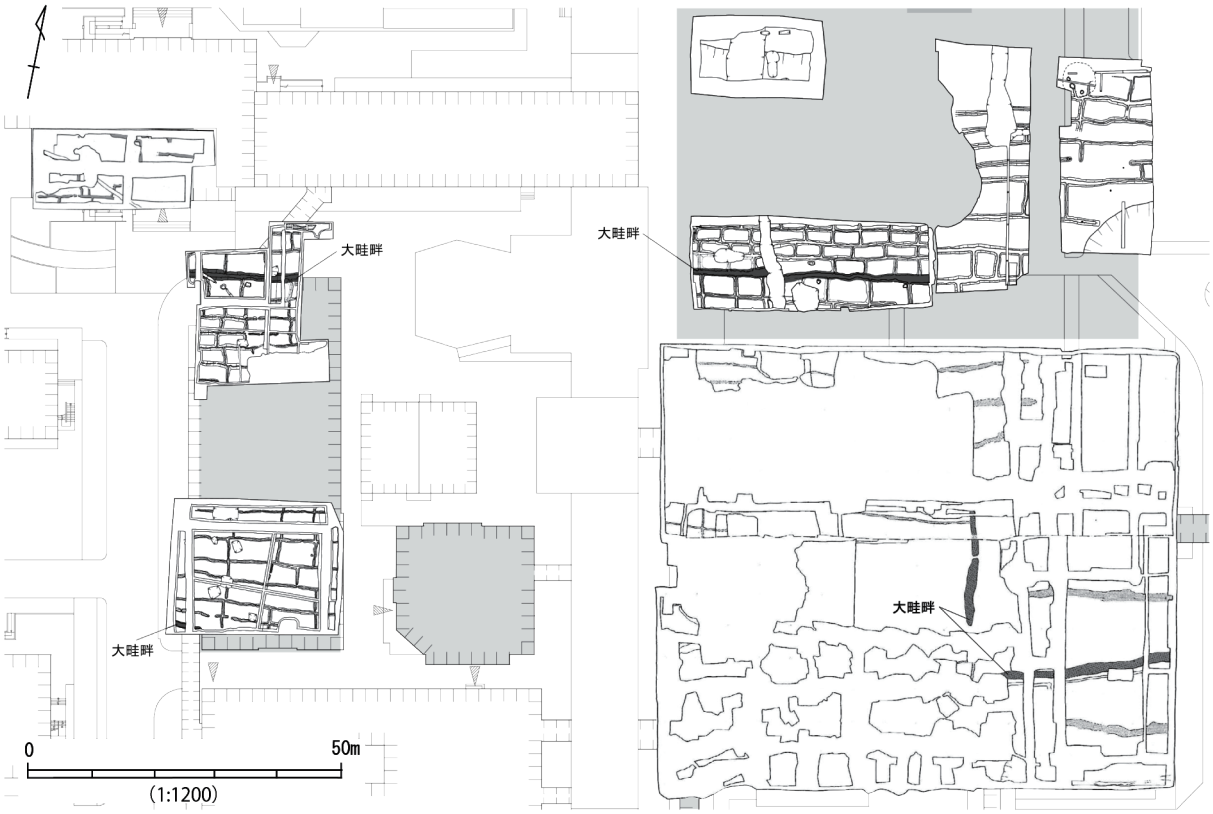


図 4　庄・蔵本遺跡水田遺構

儀礼（図 2）からみて、農耕の開始は集落と地域社会の動揺を招きながらも、これらを完全には崩していない点に注意しておきたい。

続く弥生前期中葉の徳島市庄・蔵本遺跡は、三谷遺跡の西方約 600～800m に位置する。鮎喰川の旧河道でもっとも眉山寄りの分流であった開析谷に 7 か所以上の井堰を設けて用水路を分水し、約 1 万㎡以上の水田を造成する（図 4）。また、居住地周辺の微高地縁辺部の畠地でアワ・キビ・マメ類を生産した（中村 2018）。

灌漑をともなう水田稲作の集約は、かつてない労働力投下を必要とし、食料の増産を可能とする。ここには縄文／弥生移行期以前の、ダイズ・アズキ、さらにはイネ・アワ・キビの農耕を含みこんだ多角的な生業からの飛躍が認められる。縄文時代にみられた地域社会は変容を遂げ、石棒を用いた儀礼も終焉をむかえる。

3．集落 ― その画期 ―

縄文集落の動向は、とくに縄文中期以前はまだよくわかっていない。縄文海進期に形成された砂堆や内陸部河川による自然堤防形成がみられる縄文前期後葉から中期前葉にやや遺跡数が増える時期がある。その後、縄文中期末・後期初頭から縄文晩期末にいたるまで、沖積平野上の氾濫原に微高地が形成され、以前より多くの遺跡が展開するようになる[6]。

縄文草創期から前期前半の遺跡は少ない。内陸の河岸段丘（徳島県那賀町西宮遺跡など）や、岩陰遺跡（徳島県那賀町古屋岩陰遺跡、徳島県東みよし町加茂谷川岩陰遺跡群、三好市山田Ⅰ遺跡など）などで、点々と小規模な遺跡がみつかっているだけである。遺物が明確な遺構にともなうこともまれで、遊動性の高い生活を送っていたとみられる。

このような状況に変化がみられるようになるのは、縄文前期後葉から中期前葉にかけてである。阿南市深瀬遺跡、徳島県那賀町小仁宇城跡など、内陸の河川蛇行部に形成される自然堤防や河岸段丘などのほか、鳴門市森崎貝塚、徳島市犬山遺跡、徳島県美波町田井遺跡など、縄文海進に対応して形成されたとみられる沿岸部の微高地への進出が認められる。外来系土器が目立つようになるほか、在地志向の強かった石材利用は、香川県金山産サヌカイトが太平洋沿岸にいたるまで波及するなど、遠隔地との交易も活発化する。しかしその後、縄文中期末までの遺跡数は多くはなく、縄文中期末以降の集落との連続性はあきらかではない。

縄文中期末以降に遺跡数は増加する。貞光前田遺跡、美馬市薬師遺跡、稲持遺跡、徳島県東みよし町土井遺

図 5　徳島平野南部眉山北麓における縄文／弥生移行期の遺跡と立地

跡、大柿遺跡、深瀬遺跡、西宮遺跡など、内陸部の河岸段丘や自然堤防に立地する遺跡、森崎貝塚、阿南市蒲生田遺跡、大里浜崎遺跡など、沿岸部の微高地に立地する遺跡など、従来からの居住適地のほか、矢野遺跡、徳島県石井町石井城ノ内遺跡、徳島県板野町黒谷川郡頭遺跡、庄遺跡、名東遺跡、三谷遺跡、小松島市新居見遺跡、宮ノ本遺跡など、新たに河川下流域における沖積平野の氾濫原に立地する遺跡がみられるようになる。

また、徳島市城山貝塚のような内湾漁撈に特化した貝塚（図 5）、鳴門市桧寺前川遺跡や三好市西州津遺跡などドングリピットが群集する遺跡、愛媛県久万高原町猿楽遺跡のような標高 1000m 前後の高所に営まれる遺跡など、役割の特化した中小規模の遺跡がみられるようになるのもこの時期以降である。

矢野遺跡は、鮎喰川の形成する標高約 7m の氾濫原に立地する（藤川・氏家・湯浅ほか 2003、氏家 2018）。矢野遺跡では、第 6（下層）遺構面、第 4（中層）遺構面、第 3（上層）遺構面の 3 遺構面が確認された。下層遺構面は、縄文中期末・後期初頭の遺構を多数検出している。竪穴住居 10 棟、炉跡（地床炉）54 基、土坑 180 基のほか、竪穴住居の可能性が残る不明遺構 31 基、土器棺墓と集石遺構各 1 基である。これらの遺構が、長軸径 200m ほどの間に密集し、中央部に径 40m ほどの遺構空白地帯をもつ。この空白部からは、土製仮面や石棒の出土が認められる。縄文中期の関東・中部地域によくみられる「環状集落（中央の広場を取り囲むように住居跡や遺構が配置される集落）」にも似た形状をなしている。遺構、とくに竪穴住居・炉跡・不明遺構を合わせた住居関連遺構の検出数と遺跡の規模、集落の形状は列島西部の沖積平野に立地する縄文集落としては、大型の部類である。しかしこの環状を呈する集落の存続期間は、下層遺構面のみである（氏家 2018）。

矢野遺跡下層～中層遺構面の集落は、規模や形状、遺構の密集度、石棒の出土などからみても、成立背景すべてを列島西部における内的発展に求めることはできない。直接的ではないにせよ、列島東部からのインパクトが考えられる。

しかし、このような長期継続を想定する集落は、列島西部における資源利用や他集団との関係から時期・地域ともに限定的な局面でのみ現れたと考えられる。基本的には土器 1～2 型式程度でほかの居住適地へと移動したものと考えられる。また、比較的近い距離で

の移動にとどまって、資源利用の継続性は想定できるので、「遊動性」とは性格を異にすると考えられる。

移動する集落の背景には、地形環境も影響したと考えられる。長期継続を想定した集落は、台地・河岸段丘といった安定的な地形環境に立地してこそ機能する。一方当該地域における縄文中期末以降の集落は、沖積平野上の氾濫原に形成されつつあった中州性の微高地や自然堤防を有力な居住地のひとつとした。しかし、氾濫原である以上、洪水による埋没と微高地の浸食への対応をはからねばならない。洪水の多い氾濫原での地形環境へ対応するなかで、小規模・短期移動型・散住といった戦略へ移行した。これらと有機的な繋がりをもった内陸部の河岸段丘など、安定した地形環境に立地する集落も、基本的には同様な展開をする。

庄遺跡は、鮎喰川の旧河道（開析谷）が蛇行し、分流する部分の凸岸側の自然堤防上に立地している（前川ほか 1996、前川 1997、岡山 1999）。縄文後期中葉から晩期中葉までの遺構・遺物がみられる。しかし空白期間や、遺構・遺物出土地点の移動はみられるので、大規模な移動はみられないとしても、断続的に集落の再編はおこなわれたとみてよい。遺構・遺物がもっとも多くなるのが、縄文後期末から晩期初頭である。竪穴住居 1 棟のほか、不明遺構 2 基、土坑 9 基などが検出された。竪穴住居は石囲炉をもち、不明遺構は住居跡の可能性を残している。隣接地の調査でも、土坑や大型石棒などが出土している。また、下流微高地側から旧河道に投棄したとみられる縄文晩期中葉の土器が多量に出土しており、集落が近隣の微高地上に断続的に展開していったと推察される。やや未調査地が多いものの、2〜3 棟の住居が、開析谷に面した自然堤防上に立地し、生活適地への移動を繰り返したと考えられる。庄遺跡と同様な様相は、勝浦川下流域の新居見遺跡、那賀川下流域の宮ノ本遺跡などでもみられた。

三谷遺跡は、庄遺跡と同じ開析谷の 1km ほど下流、眉山北麓に近い自然堤防上に位置する縄文／弥生移行期の集落である。この開析谷は、眉山北西麓に沿って北東方面に流れていた。山麓に形成された崖錐状の微高地を避けるように蛇行し、蛇行部の凹岸側にも微高地をもっていた。当時の内湾に近い最下流部の微高地に立地する（図 5）。

調査地北側に展開する微高地から南側眉山山麓の開析谷に面した自然凹地に貝塚が形成され、多量の遺物が投棄されていた。3 つの地点貝塚は、約 0.2〜− 0.5m の高さに形成される。8 体にもおよぶイヌの埋葬がみられ、未製品を含む 30 点近くにおよぶ石棒や骨角製装身具などがまとまって出土していることなどから、祭祀の場も兼ねていた可能性が高い（勝浦編 1997）。

貝塚は微高地南側のほか南東側にもみられることから、開析谷は調査地東側で大きく蛇行し、北東方向に向かっていた可能性が高い。貝塚の位置や遺物投棄の様相から、居住域の位置する微高地が調査地の北側に位置すると想定できた。

微高地の現地表面は 1.8m をはかる。標高約 1.6m において、縄文／弥生移行期の遺構・遺物が確認されている（中村編 2017）。竪穴住居跡と考えられる SX1（E − SX1）をはじめ、複数の土坑を検出し、凸帯文土器と遠賀川式土器が遺構内からともに出土する。また、開析谷対岸、南西側の微高地においても凸帯文土器を検出している。

三谷遺跡の立地は、貝塚や標高からみてもわかるように、内湾から潮間帯に極めて近い環境にある[5]。貝塚の出土資料を検討すると、狩猟・漁撈・採集・農耕からなる、バランスのとれた生業をおこなっている。灌漑施設や水田の検出もなく、灌漑水田稲作に傾斜していく様相はみられない。農耕を既存の生業のなかに、選択肢のひとつとして加えた過渡期の集落といえる。

列島東部系土器やサヌカイトの大型剥片、石棒祭祀、他遺跡との比較などからも、地域社会の中心的な集落に位置づけることは可能である（図 2）。

三谷遺跡と同時代に、北東 1km 程にある独立丘陵城山東麓の海蝕洞窟に営まれた城山 2 号・3 号貝塚（湯浅 2017・2020）は、漁撈に特化したキャンプサイトで、当該期に内湾漁撈は重視されていたことがわかる。

一方、三谷遺跡が機能している間に、西方へ約 600〜800m 内陸に、庄・蔵本遺跡（南蔵本遺跡を含む）が形成をはじめた（図 5）。標高は約 2〜3m ほどで、三谷遺跡に近い潮間帯に接続する沖積平野に立地する。淡水が流下する緩傾斜を保ち、用水路を用いた灌漑水田（図 4）に適した環境にある。大陸系の墓域が 2 か所みられ、小規模ながら井堰と灌漑用水路を検出する。続く弥生前期中葉のような、大規模な集落や水田域、用水路網こそ形成途上ではあるが、大陸系文化・灌漑水田稲作への指向を強くする中心的集落が成立過程にあったことがわかる。

このように、縄文／弥生移行期にいたって、はじめて生業や集落形態の明確に異なる複数の集落が、沖積平野内において近接して営まれるようになった。これは、沖積平野における半径 5〜6km 圏内に 1 か所の中心的集落を基本的な単位とする縄文中期末から晩期後葉には、みられなかったことである。直後の弥生前期

中葉に三谷遺跡・城山貝塚は姿を消し、石棒の生産も停止する。さらに庄・蔵本遺跡は灌漑水田稲作を拡大し、大規模化する。この間に大きな飛躍を認めて、「共生（中村 1998・2022）」とよんでいる。

縄文／弥生移行期の集落像、すなわち大陸系文化を伴った灌漑水田稲作を軸とする中心的集落の出現過程は、地域によって多様性があったと考えられる。一方、特異な形で広まった三谷型石棒の需要が急速になくなるのは、それぞれの地域社会が同じような歴史的背景に直面していたことを示唆する。

おわりに

以上、中四国地域を中心に、縄文中期末から弥生前期中葉にいたる呪術具・生業・集落を分析し、縄文時代から弥生時代への変化と画期を考察してきた。上記 3 要素はそれぞれ互いに関連しあい、おおよそ次のようにまとめることができる。

a．縄文中期末から後期前葉

呪術具としての大型石棒は、縄文中期末頃に列島東部より伝わったと考えられる。同時代には植物利用上の画期もみられ、水銀朱の利用開始からウルシ利用の活発化が想定される。また、長期継続を視野におく、沖積平野などに従来よりも規模の大きな集落がみられるようになった。

b．縄文後期中葉から晩期中葉

大型石棒と併行して刀剣形石製品が顕著にみられるようになる。ダイズ・アズキの定着が明確となって、農耕が生業の一角を占めるようになる。集落形態は地域の資源利用や地域社会相互の関連、地形環境などにあわせて、小規模・短期移動型・散住といった戦略へ移行していった。比較的近い距離での移動にとどまって、資源利用の継続性はみられるので、「遊動性」とは異なる。また、内湾漁撈に特化した地点貝塚、ドングリピットが群集する遺跡、標高 1000m 前後の山間部遺跡など、役割の特化した遺跡がみられるようになる。

c．縄文晩期後葉

イネ・アワ・キビが定着し、これらの生産が生業の重要な一角を占めるようになる。一方で集落形態に変化はみられない。刀剣形石製品は衰退する一方、大型石棒は継続する。

d．縄文／弥生移行期

三谷遺跡を中心とする四国東部地域では、三谷型石棒を生産し、列島西部東半一帯に広くもち運ばれた。三谷遺跡では、狩猟採集に農耕をくわえたバランスのとれた生業を踏襲していた。

一方で、三谷遺跡の西方内陸部方面に位置する庄・蔵本遺跡（南蔵本遺跡を含む）では、大陸系の墓域、灌漑施設を擁する集落形成を開始していた。このように、集落経営の方向性を異にする複数の集落が、狭い範囲に併存することがあきらかになった。この過渡期の特殊なあり方は「共生（中村 1998・2022）」とよぶにふさわしい。

三谷遺跡では、列島東部系の文物を積極的に取り入れるなかで三谷型石棒の生産を活発におこなった。この背景には、灌漑水田稲作をともなった大陸系文物に直面し、地域社会は動揺していたことが考えられる。同様の事態に直面する列島西部東半一帯へ、三谷型石棒はもち運ばれた。

e．弥生前期中葉

庄・蔵本遺跡では、大規模な灌漑施設や用水路を設け、1 万㎡をこえる水田を造成するなどして、灌漑水田稲作を生業の軸とする、かつてない規模の集落が成立し、集落像・地域社会は大きな飛躍を遂げた。三谷遺跡は廃絶され、三谷型石棒の生産も停止する。前代にみられた「共生」はここに終焉を迎える。

以上の動向、なかでもｄ．縄文／弥生移行期からｅ．弥生前期中葉に向かう歴史的画期は、決して四国東部地域のみのローカルな問題ではないと考えられる。

三谷遺跡の廃絶と三谷型石棒の生産停止は、列島東部起源の縄文時代特有の儀礼を共有することによって存続が模索された、列島西部東半一帯における地域社会（網）の解体を意味する。すなわち、それは広域にわたる集落・地域社会の画期的な変容を示唆すると考えられるからである。

註

1）ただし、今後西日本において、より古い時期の石棒がみつかる可能性には留意しておきたい。

2）本稿で用いる「縄文／弥生移行期」は、長原式併行期直後の凸帯文土器と弥生前期前葉の遠賀川式土器が併存する期間に限定する。すなわち、既に弥生前期中葉にはこうした様相が解消しているとみる立場である（中村 2022）。

3）小林青樹氏提唱による、「多角柱形大型石棒（小林編 2000）」である。

4）三谷型石棒は、縄文／弥生移行期に生産を終える。この時点で需要は急減しており、石棒儀礼に用いるという本来の役割も終えている。それ以後の出土例は基本的に再利用か混入とみてよく、儀礼自体変容を遂げていると判断される。

5）ただし、潮汐灌漑をおこなった可能性は残る。
6）四国地域を含む列島西部一帯では、縄文中期中葉から後葉の遺跡が少ない傾向にあって、その連続性を把握しえない。

引用文献

泉　拓良 1985「縄文時代」『図説発掘が語る日本史 4　近畿編』新人物往来社

氏家敏之 2018『徳島の土製仮面と巨大銅鐸のムラ　矢野遺跡』新泉社

丑野　毅・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』第 24 号

遠藤英子 2012「列島西部の縄文晩期から弥生前期遺跡を対象としたレプリカ法の実践 ― 第 2 次調査：中国・四国地域 ― 」『高梨学術奨励基金年報平成二四年度研究成果概要報告』46

大下　明 1988「石器・石製品について」『伊丹市口酒井遺跡 ― 第 11 次発掘調査報告書 ― 』伊丹市教育委員会ほか

岡山真知子 1999『庄遺跡Ⅲ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 24

小畑弘己 2011『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社

小畑弘己 2015「植物考古学から見た九州縄文晩期農耕論の課題」『九州縄文晩期の農耕問題を考える』九州縄文研究会

小畑弘己 2016『タネをまく縄文人 ― 最新科学が覆す農耕の起源 ― 』吉川弘文館

小林青樹編 2000『縄文・弥生移行期の石製呪術具 1』文部省科学研究費補助金特定領域研究（A）1 研究成果報告書

角田徳幸編 1998『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 5　板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会

勝浦康守 1990『名東遺跡発掘調査概要』名東遺跡発掘調査委員会

勝浦康守編 1997『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

勝浦康守・市川欣也編 2018『三谷遺跡　本文分冊・自然遺物編』徳島市教育委員会

木田　真 2014『智頭枕田遺跡』智頭町埋蔵文化財調査報告書 12

栗林誠治編 2001『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 18　大柿遺跡Ⅰ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告 37

後藤信祐 1986「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究上」『考古学研究』33－3

後藤信祐 1987「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究下」『考古学研究』33－4

渋谷高秀・佐伯和也編 2005『徳蔵地区遺跡』和歌山県文化財センター

鈴木三男 2014「縄文人がウルシに出会ったのはいつ？」『ここまでわかった！縄文人の植物利用』新泉社

曽我貴行 2004『居徳遺跡群Ⅵ』高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書 91

高須　晃 2000「三田谷Ⅰ遺跡より出土した石器石材の岩石学的研究と原産地の推定」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ　三田谷Ⅰ遺跡 3』島根県教育委員会

田中清美ほか 1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』大阪市文化財協会

鳥谷芳雄編 2000『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ　三田谷Ⅰ遺跡 3』島根県教育委員会

中沢道彦・丑野　毅 1998「レプリカ法による縄文時代晩期土器の籾状圧痕の観察」『縄文時代』第 9 号

中沢道彦・丑野　毅 2003「レプリカ法による山陰地方縄文晩期土器の籾状圧痕の観察」『縄文時代』第 14 号

中沢道彦・中村　豊・遠部　慎 2012「レプリカ法による徳島県三谷遺跡出土土器の種実圧痕の研究」『青藍』第 9 号

中沢道彦 2014『先史時代の初期農耕を考える ― レプリカ法の実践から ― 』日本海学研究叢書

中沢道彦 2015「長野県域における縄文時代の終末と生業変化」『八ヶ岳山麓における縄文時代の終末と生業変化』明治大学日本先史文化研究所

中村　豊 1998「稲作のはじまり ― 吉野川下流域を中心に ― 」『川と人間 ― 吉野川流域史 ― 』溪水社

中村　豊編 2001『縄文・弥生移行期の石製呪術具 3』文部省科学研究費補助金特定領域研究（A）1 研究成果報告書

中村　豊 2005「列島西部における石棒の終末 ― 縄文晩期後半における東西交流の一断面 ― 」『縄文時代』第 16 号

中村　豊 2007「縄文 ― 弥生移行期の大型石棒祭祀」『縄文時代の考古学 11　心と信仰 ― 宗教的観念と社会秩序 ― 』同成社

中村　豊 2009「石棒を通してみた縄文から弥生への地域社会の変容」『一山　典還暦記念論集　考古学と地域文化』

中村　豊 2013「結晶片岩製石棒の拡散」『農耕社会成立期の山陰地方』山陰考古学研究集会
中村　豊 2014a「中四国における縄文時代精神文化について ― 大型石棒・刀剣形石製品を中心に ―」『山陰地方の縄文社会』島根県古代文化センター研究論集 13
中村　豊 2014b「縄文時代」『新修茨木市史　第 7 巻史料編考古』
中村　豊・中沢道彦 2014「レプリカ法による徳島地域出土土器の種実圧痕の研究」『青藍』第 10 号
中村　豊 2015「縄文晩期から弥生時代の農耕について ― 東部瀬戸内地域を中心に ―」『みずほ別冊 2 弥生研究の交差点 ― 池田保信さん還暦記念 ―』大和弥生文化の会
中村　豊編 2017『縄文／弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究（26370897）』日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書
中村　豊 2018「稲作主体でない複合的農耕の探究」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会実行委員会
中村　豊 2019「四国東部地域における縄文および弥生前期の遺跡動態と地形環境」『日本考古学協会 2019 年度岡山大会研究発表資料集』日本考古学協会 2019 年度岡山大会実行委員会
中村　豊 2022「終末期の土器・呪術具及び集落の変遷からみた縄文／弥生移行期の研究展望」『縄文時代』第 33 号
中村　豊 2023a「石棒論 ― 刀剣形石製品と三谷型石棒 ―」『季刊考古学』別冊 40　雄山閣
中村　豊 2023b「結晶片岩製石棒の生産と流通」『季刊考古学』別冊 41　雄山閣
中山誠二 2010『植物考古学と日本の農耕の起源』同成社
中山誠二 2014『日韓における穀物農耕の起源』山梨県立博物館
中山誠二 2020『マメと縄文人』同成社
那須浩郎・久保和士・久保禎子・中沢道彦・中村　豊 2018「三谷遺跡の炭化種実からみた縄文～弥生移行期の植物利用」『三谷遺跡　本文分冊・自然遺物編』徳島市教育委員会
那須浩郎・山本悦世・岩崎志保・山口雄治・富岡直人・米田　穣 2020「津島岡大遺跡から出土した植物種子の再検討」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2018』
野崎貴博・光本　順・中村大介ほか 2006『津島岡大遺跡 17 ― 第 23・24 次調査 ―』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 22
濵田竜彦 2014「山陰地方の突帯文土器と縄文時代終末期の様相」『中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』中四国縄文研究会
林　謙作 1988「考古学と文化」『歴史評論』453
廣瀬時習編 2008『池島・福万寺遺跡 5』大阪府文化財センター調査報告書 179
藤川智之・氏家敏之・湯浅利彦 2003『矢野遺跡Ⅱ　縄文時代篇』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 44
前川直江・森本浩史・湯浅文則 1996『庄遺跡Ⅰ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 16
前川直江 1997『庄遺跡Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 21
前澤郁浩編 2012『柿の内東遺跡 1 次・菅原西遺跡 1 次・川西根成柿遺跡 1 次発掘調査報告書』大和高田市埋蔵文化財調査報告書 10
前田佳久編 1993『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
三阪一徳・脇山佳奈・端野晋平 2016『庄・蔵本遺跡 2』徳島大学埋蔵文化財調査報告書 5
山元敏裕編 1995『井手東Ⅱ遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告 27
湯浅利彦 2017「徳島市城山貝塚発掘調査の復元的研究（上）」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』3
湯浅利彦 2020「徳島市城山貝塚発掘調査の復元的研究（下）」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』4

挿図出典

図 1　中村 2023b をもとに作成　板屋Ⅲ（角田編 1998）、三田谷Ⅰ（鳥谷編 2000）、津島岡大（野崎ほか 2006）、智頭枕田（木田 2014）、東奈良（中村 2014b）、長原（田中ほか 1982）、大開（前田編 1993）、北仰西海道（中村実測）、川西根成柿（前澤編 2012）、徳蔵（渋谷・佐伯編 2005）、池島福万寺（廣瀬編 2008）、名東（勝浦 1990）、大柿（栗林編 2001）、三谷（勝浦編 1997）、居徳（曽我 2004）、井手東Ⅱ（山元編 1995）
図 2　上段：1（勝浦 1990）、2・5～11（勝浦編 1997）、3（中村実測）、4（栗林編 2001）、下段：（勝浦編 1997）
図 3　1～4（中村・中沢 2014）、5・6（中村撮影）、6 の年代（那須ほか 2018）
図 4　三阪ほか 2016
図 5　正式 2 万分の 1 地形図徳島市による（中村 2019 を修正）